

# 明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)  
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

「漢籍整理長期研修の過去・現在・未来」  
大木 康

「故澤谷昭次さんを偲んで」  
岡本 さえ

「漢籍整理長期研修を出発点として」  
高橋菜奈子

「漢籍整理長期研修を礎に  
「廣島大學所藏漢籍目録」への挑戦」  
赤迫 照子



# 漢籍整理長期研修の過去・現在・未来

大木 康

東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センターが主催する漢籍整理長期研修は、今年度で33回を数えました。本『明日の東洋学』では、この研修会を振り返り、その現状と未来について考えてみたいと思います。

東洋学研究情報センターの前身である東洋学文献センターは、京都大学人文科学研究所の東洋学文献センターとともに、全国に二箇所設けられた東洋学文献センターの一つとして設立されました。京都大学人文科学研究所には旧東方文化研究所の、そして東京大学東洋文化研究所には旧東方文化学院の膨大な漢籍が収蔵されております。京都にあっては、早くも東方文化研究所時代に刊行された二種類の目録に加え、『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』が昭和38(1963)年に完成しておりました。東京にあっては、研究所所蔵漢籍の目録編纂が東洋学文献センターの最初の重要な使命でありました(京都のセンターは、昭和40(1965)年4月1日に開設、東京は一年遅れの昭和41年4月1日に開設)。そして、京都大学人文科学研究所の目録に学びつつ、『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』(本文篇)が完成したのが昭和48(1973)年のことでした。

『東洋文化研究所の50年』(東洋文化研究所 1991)「年表」によれば、昭和47(1972)年5月18日の項に、「文部省の主催で開かれることになった漢籍担当職員講習会につい



漢籍補修法実習の様子(平成24年度)

て、研究所として協力していくことが教授会で確認される」とあります。この漢籍担当職員講習会は、もとは文部省(当時)の主催によるもので、京都と東京で行われておりました。東西両研究所で漢籍目録を編纂した経験をより多くの機関に伝え、漢籍整理の普及をはかることがその目的です。この当時、期間は一週間だったようです。

これが昭和55(1980)年に至って、文部省主催から研究所のセンター主催となり、この年の第1回には3名の受講者を迎えて、現在の形での漢籍整理長期研修がはじまりました。自館における研修期間をはさんで、前半2週間、後半1週間になったのは、このときのことです(その後、平成17(2005)年から前半1週間)

江戸時代まで、日本において学問といえば、基本的には漢学のことであり、日本でも数多くの漢籍が刊行されました。漢籍とは、一般には「中国人によって、中国語(漢文)で書かれた」書物のうち、清代の終わりまでに書かれたもの(旧学書)を指しています。しかし、その刊行年、出版地は問わないことになっておりますから、日本で刊行された数多くの和刻本も、すべて漢籍として扱われることになります。結果として、日本各地の図書館には相当多くの漢籍が収蔵され、その目録を作成する必要があるわけです。

ところが漢籍目録の作成には、例えば書名の採り方一つを見ても、扉の書名を採るのではなく、第一巻第一葉の書名を採るといった、一般の和書とは異なった多くの独特の規則があり、それを学ぶ必要があるのです。長期研修がはじまってからのおよそ30年の間に、80を超える機関から250名あまりの受講者がありました(付表参照)。このこと自体、日本における漢籍整理研修の必要性を如実に示しているのではないかと思います。参加された機関には、国公私立の大学図書館ばかりでなく、博物館や寺院、あるいは高等学校なども含まれており、漢籍の収蔵が広範囲にわたっていることを示しています。

現在本研修では、はじめに「漢籍版本目録概説」として、漢籍に関する全般的な知識を簡単に概観し、それに続いて漢籍特有の分類法である「四部分類について」、また実際に漢籍のデータシートを作成する「漢籍整理実習」を行っています。その他に「朝鮮本について」「和刻本について」「漢籍補修法」などの授業も開設し、東洋文庫など図書館の見学、さらには「全国漢籍データベース」との連携を考え、「漢籍データベースの利用と構築」の授業も設けてい

ます。夏の間は、各自の所属館での漢籍データシート作成の実習になりますが、その成果を持ち寄り、後半の最終日、研修生の報告と講師からのコメントによって長期研修が結ばれます。このような形で、漢籍目録作成とそれに関連する知識を無理なく学べるよう、カリキュラムを組み立てています。

研修の受講生の手によって、『広島大学ス波文庫漢籍目録』その他、冊子体の目録が作られもし、また京大人文研が中心になって運営している(東文研と国立情報学研究所との三者が幹事機関)全国漢籍データベースに加入するという形で、目に見える具体的成果が挙がっています。

漢籍といいますが、たしかに和綴りの古い本というイメージがありますが、実はさきほど申しましたように、清代までに書かれた書物のことであって、今日中国や台湾で毎日のように刊行されている書物も、それが清代までの著者によるものであれば、みな漢籍の仲間に入るわけです。したがって、いずれの図書館においても、漢籍はこれからも

どんどん増えていくはずであって、漢籍目録作成の需要は、永遠になくなることはありません。

日本において漢籍を多く所蔵する代表的機関の一つである本所にとって、漢籍整理研修の運営は、その重要な責務であると考えております。これからも、京都大学人文科学研究所、慶應大学附属研究所ス道文庫、宮内庁書陵部、東洋文庫など関連機関のご協力を得ながら、こうした活動を継続して行うつもりであります。ご期待ください。

本号では、まずこの漢籍整理長期研修に長く関わられた岡本さえ名誉教授、そしてこれまで受講された多くの受講生を代表して、現在国立情報学研究所に勤務される(受講当時東北大学附属図書館)高橋菜奈子さん、そして広島大学に所蔵される漢籍の目録を作成された同大学大学院文学研究科研究員の赤迫照子さんのお三方から玉稿をいただくことができました。心より御礼申し上げます。(東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報研究センター長)

## 参加機関一覧

- |             |              |                |               |
|-------------|--------------|----------------|---------------|
| 1 北海道大学     | 22 福井大学      | 43 国学院大学       | 64 国立国会図書館    |
| 2 北海道教育大学   | 23 名古屋大学     | 44 立教大学        | 65 東洋文庫       |
| 3 弘前大学      | 24 京大図書館     | 45 フェリス女学院大学   | 66 愛知淑徳大学     |
| 4 東北大学      | 25 京大人文研     | 46 桜美林大学       | 67 大阪教育大学     |
| 5 宮城教育大学    | 26 大阪大学      | 47 創価大学        | 68 駒澤大学       |
| 6 山形大学      | 27 神戸大学      | 48 早稲田大学       | 69 佛教大学       |
| 7 図書館情報大学   | 28 奈良教育大学    | 49 青山学院大学      | 70 大倉集古館      |
| 8 筑波大学      | 29 奈良女子大学    | 50 法政大学        | 71 成蹊大学       |
| 9 千葉大学      | 30 岡山大学      | 51 明治大学        | 72 福島県歴史資料館   |
| 10 東大図書館    | 31 広島大学      | 52 上智大学        | 73 中央大学       |
| 11 東大法学部    | 32 愛媛大学      | 53 大東文化大学      | 74 津図書館       |
| 12 東大教養学部   | 33 高知大学      | 54 国際基督教大学     | 75 横浜ユーラシア文化館 |
| 13 東大東文研    | 34 九州大学      | 55 実践女子大学      | 76 千葉県立西部図書館  |
| 14 東大経済学部   | 35 長崎大学      | 56 慶應義塾大学      | 77 岡山県立図書館    |
| 15 東大文学部    | 36 熊本大学      | 57 専修大学        | 78 横浜市立大学     |
| 16 東京外国語大学  | 37 鹿児島大学     | 58 関西大学        | 79 鶴見大学       |
| 17 東京藝術大学   | 38 琉球大学      | 59 民族学振興会      | 80 埼玉県立川越高校   |
| 18 お茶の水女子大学 | 39 国文学研究資料館  | 60 アジア・アフリカ図書館 | 81 宮城県図書館     |
| 19 一橋大学     | 40 国立歴史民俗博物館 | 61 仙台市民図書館     | 82 龍谷大学       |
| 20 新潟大学     | 41 東京都立大学    | 62 都立中央図書館     |               |
| 21 金沢大学     | 42 二松学舎大学    | 63 総本山長谷寺      |               |

昭和55年度には始まり、センターの前身である東洋学文献センター時代から実施してきた漢籍整理長期研修は、33回を数えた。参加機関は82機関となり、249名が受講した。

## 故澤谷昭次さんを偲んで

岡本 さえ

### 東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録

1966（昭和41）年に東京大学東洋文化研究所に東洋学文献センターが附設された時、その最初の事業として本研究所の漢籍分類目録の刊行が企画された。澤谷さんは文献センターの専任教官のひとりとして、初見昇講師や陳明新助手、さらに神田百合枝、および畦浦美矢子の専任事務官、また事務補佐員の人たち、本研究所図書室の植谷掛長や図書掛事務官、東洋文化研究所の教官・事務官たちと協力して、1973（昭和48）年に本文篇、1975（昭和50）年に索引篇を完成させた。

澤谷さんは漢籍の経部・史部を、陳さんは子部・集部・叢書部を分担したから、おふたりはまさに両輪となってこの事業を前進させ、漢籍分類目録を世に送り出したといえよう。

本文篇と索引篇の2冊は、1981（昭和56）年に補訂合冊縮印版の1冊にまとめられて、使いやすくなった。現在は、この漢籍分類目録に記録されなかった1968（昭和43）年以降の購入漢籍や現代中国書も含めて、研究所所蔵の図書は電算処理されていて、東洋文化研究所所蔵漢籍目録データベース及び東京大学のOPACで検索できる。しかし澤谷さんたちが作った東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録は、研究所の漢籍を一望できる参考図書として、現在も各地の図書館で親しまれている。

### 文献センター助手の澤谷さん

1971（昭和46）年に、駒場の教養学部仏語教室の助手だった筆者は東洋文化研究所の助手公募で採用されたが、研究所に来ると多彩な専門分野の助手がおられるので驚いた。文化人類学の青木保さん、東洋史の加藤祐三さん、仏教の江島恵教さん、インド史の長崎暢子さん、フィリピン研究の池端雪浦さん、道教の蜂屋邦夫さんほかの助手。むろん文献センター助手の澤谷さん、陳さんも助手会の仲間だった。入った年度により、助手は出る時も違った。東南アジア経済の原洋之介さんは、少し後に入られたが助手として一緒に時期があった。

1967（昭和42）年から文献センターにおられる澤谷さんは大先輩の助手だったが、気さくに誰とも話され、いつも助手会の中心だった。ときには「助手の大コンパをやる」と加藤さんたちが言い、みなで養老の滝や浅草柴又にも行った。澤谷さんがユーモラスな替え歌を唄って、一同笑い転げたこともあった。大学紛争の後だったが、助手会では



研修会場に並べられた漢籍目録など各種参考書

みなが朗らかだった。

当時は東洋文化研究所だけの自前の建物でなかったから、5階には研究所の職員が多かったように記憶する。澤谷さんの研究室も5階にあって、その部屋は職員も、研究所の先生も、他大学や他機関の研究者たちも遠慮なく訪れ、にぎやかだった。

漢籍講習でも澤谷さんは全国から来られた受講者に、中国書全体を説明のうえで、経史子集の四部、漢籍の扱い方、分類方法、カード作成まで、しばしば時間を超えて指導された。筆者は1990（平成2）年に、千葉大学教養部から本研究所に転勤し、戸田禎佑主任のあとを継いで漢籍講習の主催者となったが、各地からみえた職員から澤谷先生の応援を受けたと聞いた（八戸市や新潟、広島での目録については、1994年にセンター通信No34に記したことがある。）

漢籍講習では研究所の松丸道雄先生、当時文学部中文の大木康先生、京都大学人文科学研究所の勝村哲也先生、1981（昭和56）年以来、山口大学人文学部で中国哲学を教えておられた澤谷さん、ほかに内閣文庫や宮内庁書陵部からも講師としてご協力いただいた。ただ残念なことに、筆者が漢籍を学ぶ最大の師としていた澤谷さんは、1993（平成5）年3月に亡くなられた。

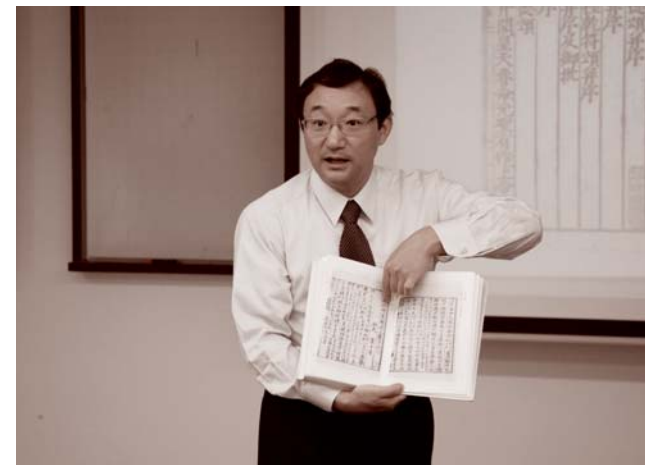
### 山口大学教授の澤谷さん

澤谷さんのもとで2年間講義を受け、山口大学を卒業後東京大学大学院に進学した井ノ口哲也さん（東京学芸大学准教授）は、澤谷さんから中国哲学講読、中国哲学史、中国哲学演習、中国哲学特殊講義、東洋文化論などを受講した。澤谷さん最後の講義期間（1992年後期）の中国哲学演

習では、王鳴盛「十七史商榷」・錢大昕の「二十二史考異」・趙翼「二十二史劄記」を比較して三書の「史記」に関する部分を検討したと、井ノ口さんは記憶している。

澤谷さん逝去の3月25日は、卒業式だったという。井ノ口さんの手紙に、「教え子の卒業を見届けるかのように亡くなられた」とある。大学院進学後、彼が本研究所図書室で漢籍整理のアルバイトをした時も、澤谷さんと旧知の司書の方たちに良くしていただいたという。

筆者は千葉大学教養部で1987（昭和62）年に、総合科目のマニュアル「中国」を編集し、その序論「中国研究を志す人々のために」を山口大学の澤谷さんに書いていただいた。澤谷さんは1970年代から80年代によく知られた日本・中国・アメリカの特派員報告や学術書、さらに海外旅行入門までひろく見渡して執筆された。



大木康講師による漢籍版本目録概説の講義の様子（平成21年度）

## 漢籍整理長期研修を出発点として

高橋 菜奈子

私が東京大学東洋文化研究所東洋学文献センターで行われた漢籍整理長期研修に参加したのは平成6年、東北大学附属図書館に就職して2年目のことです。その後、新潟大学附属図書館、宮城教育大学図書館、一橋大学附属図書館を経て、現在は、国立情報学研究所の学術基盤推進部学術コンテンツ課図書館連携チームというところに所属し、NACSIS-CATをはじめとする様々な学術情報システムの運営の仕事を行っています。現在の仕事は漢籍とは無縁の

筆者が感服したのは、澤谷さんが1930年代の中国の農村・地方都市の姿を、同年代の日本の農村・地方都市と比べて書いていることだ。澤谷さんはさらに、1980年代の中国と1930年代の中国を比べ、1980年代と1930年代の日本を比べることもすすめる。半世紀にどんな変化が起こり、両国に共通するものは何か。それは何を意味するのか、を考えるのが中国研究の第一歩だと主張する。筋の通った勉強方法を教養部で示していただき、ありがたかった。

### 明日への提言

筆者は東洋学文献センターが文科省によって東洋学研究情報センターに改組されるとセンターを離れ、兼務していた汎アジア部門比較思想を専攻した。次いで2001（平成13）年に定年を迎えたので、漢籍講習が21世紀になってどのように実施されているかを知らない。

ひとつだけ言えるのは、筆者が定年後に西欧（ポルトガル・スペイン・フランスなど）で漢籍を見学した際に、図書館備え付けの目録はせいぜい蒐書した者のノートを参考に作成したものだった。東洋文化研究所で作られたような精密な、そして伝統を踏まえた漢籍目録は、ヨーロッパの図書館ではまだ作れないことを確信した。

東洋文化研究所が作成した漢籍分類目録や実施してきた漢籍講習は、世界に誇るべき学術成果であり、先端的な技術であり、稀有な教育であることを、研究所や東洋学研究情報センターの皆様は、いつも自覚し、自信をもっていただきたい。そうしてこの成果を日本だけでなく、世界の研究機関や図書館にもおおいに発信していただきたい。明日の東洋学へ向けたささやかな提言です。

（東京大学名誉教授）

世界に見えますが、私自身は目録系図書館員であるという意識を持って学術情報流通基盤の整備の仕事を行っています。私にとっては図書館員としての出発点となった漢籍整理長期研修の意味を振り返ってみたいと思います。

この研修は前後半合わせて1か月半に及び集合研修とその間の自館での研鑽というスタイルをとっています。このような長い研修を受講させていただくことができたのは、東北大学附属図書館には和漢書整理の伝統があり、若手育

成を考えてくださったおかげだと思います。大学院で日本近世史を専攻し古文書を扱った経験があったので研修に送り出していただいたのではないだろうかと推測しますが、研修に参加して漢籍と古文書とは全く別の世界であることを思い知らされました。漢籍目録の書誌の読み方、整版と活字本の違い、唐本・和刻本・朝鮮本の特徴、四部分類の体系から四角号碼による漢和辞典の引き方まで、ともかくすべてが新鮮でした。当時の私の初々しい(?)感想は東北大学附属図書館報『木這子』19巻4号(1995年)に掲載されています。当代一流の先生方の講義と実習が盛り込まれたカリキュラムは、今から思えば当時の私にそれを十分に吸収できるほどの素地がなかったのが悔やまれるのですが、ともあれ、初心者を圧倒する刺激となりました。その後、しばらく私は漢籍の勉強にのめりこむことになりました。漢籍整理の面白さの入口に立つことができた研修でした。

さて、では、今の私にとって、この研修が出発点であったと思う意義を2点あげてみたいと思います。

まず、1つ目は研修で教えていただいたデータシートの効用です。目録を採るべき漢籍を手にしたとき、データシートの各項目を記入してから、最後にそれを目録の記述という形でまとめていくという手法は、本の物理的な側面をよく観察するという姿勢を養ってくれました。研修終了後も、勉強会等に参加したりしつつ、いくつかの図書館で折にふれデータシートを使って漢籍のデータを作成してみました。作成したシートと出版された漢籍目録を突き合わせる程度の答え合わせですから我流の域を出ませんが、データシートへの記入は、単純に数をこなすこともできるし、1点を深く追求することもできるし、自分の力に合わせて活用できます。この作業の量をこなすことは、地味ではありますが、漢籍の物理的な特徴を体得する過程であったように思います。カタログとして現物と格闘する姿勢を叩き込んでくれるものでした。

第2点目は、データベースとの出会いです。私がこの研修を受けた1990年代は中国語資料の目録データベース化が課題になり始めていた時期とも一致していました。研修にデータベースについての講義が入った最初の年でもあったようです。そもそも漢籍だけでなく、現代の中国書についても、日本の大学図書館における目録業務のスタンダードであったNACSIS-CATを利用してデータを登録するためには、どのようなルールで登録すべきか、文字コードはどのように扱うのか等、システムの整備が課題となっていました。加えて、漢籍も含めた古典籍の目録データ登録が望まれている時代だったと思います。中国の目録データベースの動向を知ることで、ずっと大学図書館で目録を担当していてもNACSIS-CATしか知らないという井の中の蛙に陥るかもしれないところを、いろいろなデータベースがあり得ることを意識することができたのは幸いでした。そう



安岡孝一講師による漢籍データベースの利用と構築の講義の様子(平成22年度)

こうしているうちに、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターの漢籍担当職員講習会にも参加させていただき、その縁で全国漢籍データベース(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>)に一橋大学附属図書館のデータ登録を行うという機会にも恵まれました。研修で習った東文研のデータシートと、全国漢籍データベースと、図書館のOPACとほぼ同じ構造を持つNACSIS-CATの3つの目録をどのようにマッピングし、どのように目録を作成するのがよいかという課題意識を持ちながら、仕事をさせていただくことになったのです。このころの問題を整理したものは『漢籍 整理と研究』13号(漢籍研究会2006年)に掲載しています。漢籍目録という切り口を通して、書誌データの構造やマッピングなど、目録データベースの基本を意識することになったのは現在の私の仕事にも繋がっています。

さて、ここ二十年近くの大学図書館界においては、目録の仕事は日が当たらない仕事というイメージが強かったかもしれませんが、それでもずっと漢籍整理を続け目録の現場にいたことがきっかけとなり、私は2010年に国立情報学研究所にNACSIS-CAT担当として異動することになりました。現在は、直接の担当ではなくなりましたが、日々、メタデータについて考え、よりよい学術情報流通のあり方を模索しています。目録データだけではなく、本文そのもののデジタル化が劇的に進む中で、中国の状況を漢籍も含めて注視しておくことが、日本のこれからのシステムを考える上でも重要になってくるものと思います。この研修は現在の私の考え方と経験の核を作った出発点ともいえるべき研修でした。最後になりましたが、素晴らしい内容と十分な体制で受け入れてくださった東洋文化研究所および長期の研修に快く送り出していただいた東北大学附属図書館に記して感謝の意を表します。

(国立情報学研究所 学術基盤推進部学術コンテンツ課専門員)

## 漢籍整理長期研修を礎に 「広島大学所蔵漢籍目録」への挑戦

赤迫 照子

漢籍整理長期研修のチューターである大木康教授は以前、広島大学文学部に在職されておられた。その時、斯波六郎博士寄贈書の冊子目録『広島大学ス波文庫漢籍目録』の刊行に尽力されている。同目録の編纂に際しては、吉田二美恵氏をはじめとする6名の広島大学図書館職員が漢籍整理長期研修を受講され、「『広島大学ス波文庫漢籍目録』編纂刊行事業および画像データベース公開」の功績により、平成13年度に第36回国立大学図書館協議会賞が贈られている。そして私は今、『広島大学ス波文庫漢籍目録』に続き広島大学の漢籍目録を刊行すべく準備を進めている。なぜ私は漢籍目録に携わるようになったのか、その経緯を綴りたい。

私と漢籍の御縁は、広島大学図書館研究開発室に着任した平成19年春から始まった。研究開発室の主要業務は特別集書の目録作成である。私はまず、平成6年のキャンパス移転時に図書館へ移管された文学部旧蔵漢籍に取り組むことにした。とはいえ、私は国文学が専門で唐本に触れたことはなく、四部分類の知識もほとんどなかった。それに関わらず漢籍を整理対象に据えたのは「和刻本だけでも何とかできるのではないか」という楽観的な気持ちと、「せっかく図書館で働く機会を得たのだから、普段の研究では出会えない本に関わってみたい」という唐本への好奇心からであった。

早速、膨大な漢籍群の中から冊子目録『広島大学文学部中国哲学中国文学研究室書籍目録』(昭和28年訂)に掲載されている本を搜索し、1点ずつ書誌情報を確認する作業を開始したが、すぐに行き詰まってしまった。独学の限界を思い知り、基礎から勉強するために平成20年度の漢籍整理長期研修を受講することにした。

研修は体系的でわかりやすく、受講者が落ち着いて取り組めるように大変配慮されていたと思う。印象的だったのは、講師の先生方が「これはもう、これまでの講義で習いましたか」と度々確認してくださったことである。冗漫にならないよう無駄な重複を避けるお気遣いがありがたかった。逆に時間をかけるべきところではじっくりと丁寧に御指導くださり、特に「漢籍整理実習」では間違えても何度もやり直す機会を与えていただいた。受講者同士で助け合ったのも、楽しい思い出である。

研修終了後は、研修のテキストや講義ノートで復習しながら作業に取り組んだ。歯が立たなかった冊子目録が読めるようになったのが嬉しく、また、研修が如何に実践力育

成を重視した組み立てであったかを実感した。基礎知識の獲得に加えて、文部科学省女性研究者支援モデル育成プログラム「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」研究支援員雇用制度に採択され、大学院生を研究支援員に雇用したことによって作業進度は加速した。研究支援員の中でも章剣氏(現武漢大学)と山田和大氏(現広島県立神辺旭高等学校)には随分助けられた。私と共に研修のテキストを読みながら作業に従事した彼等は、今後必ずや諸機関の漢籍目録作成に携わるであろう。研修で得た成果が新たな種を蒔き芽吹いた事例として、是非ここに記しておきたい。

文学部旧蔵漢籍の目録確認・訂正作業は、平成21年度末に完了した。そのデータは京都大学人文科学研究所東アジア人文情報学研究センターに提出し、「全国漢籍データベース」への登録を申請した。これもやはり研修で「漢籍データベースの利用と構築」を受講し、「全国漢籍データベース」の利便性や将来性を学んだことによる。

平成22年度になり広島大学大学院文学研究科研究員に着任すると、中国文学語学の富永一登教授から『文選』の目録を作ってみませんか?とお声をかけていただいた。自信はなかったが、漢籍に触れる楽しさを再び味わいたく、研修の「漢籍整理実習」と同様に調査カードを用いて目録作成を試みた。すると、斯波六郎博士の『文選諸本の研究』(斯波博士退官記念事業会 昭和32)の誤記が判明したので、目録と併せて「広島大学所蔵「文選」目録」(『中國學



長澤孝三講師による和刻本についての講義の様子(平成24年)

研究論集』第24号 平成22年4月)で報告を行った。

これで漢籍との御縁は一区切りしたと思っていたところ、今度は中国思想文化の野間文史教授から「平成23年度末に定年退職するため、研究室の漢籍を図書館に返却しなければなりません。そのリストを作って貰えませんか」とのお話を頂戴した。研究室所蔵の漢籍はかなりの点数であったが、なぜか私は迷わず、その場で「やらせてください」と御返事をした。その日から大学ノートに書誌情報を書き付け、目録を作っては野間教授に御指導を仰ぐ日々が始まった。3ヶ月で作業を終えると他の研究室所蔵漢籍も調査し、結局、平成22年度中に文学部にある計約1,300点の目録を作成した。私はいつの間にか、新しい冊子目録の作成を目指し始めていたのである。

広島大学には漢籍・和古書共に総目録がない。その原因は原爆による深刻な被害と、度重なるキャンパス移転・併合で、漢籍・和古書の所蔵状況を把握するのは困難であった。研究開発室時代に目録の不備による弊害を痛感していた私は、広島大学前身9校時代から蒐集してきた漢籍の蔵書構造をできるだけ概観可能にするべく、冊子体の漢籍目録刊行に挑むことを決心した。

漢籍目録刊行計画は平成23年度、富永教授が副学長(図書館担当)・図書館長に着任されたことで本格的に展開し始めた。私は富永教授の依頼を受けるかたちで、図書館所蔵の文学部旧蔵漢籍全てと総合科学部旧蔵漢籍の目録作成に取り組むことになった。また、成果を学界に広く発表すべく富永教授・野間教授に御教授を賜りながら「広島大学所蔵漢籍目録 經部」(『東洋古典學研究』第31号 平成23年5月)「広島大学所蔵漢籍目録 広島高等学校・広島大学教養部・総合科学部舊蔵本」(『広島大学大学院文学研究科論集』第71号 平成23年12月)等を執筆した。

研究者との交流も積極的に行った。漢籍を介して様々な分野の研究者と出会い、刺激を受けたが、中でも代々木ゼミナール講師である高木浩明氏の激励と出版への御助言には大変感謝している(高木氏による広島大学所蔵古活字本調査の成果は「古活字版悉皆調査目録稿(四)」『書籍文化史』第14号 平成25年1月に掲載)。

現在、文学部所蔵漢籍約1,300点の大半は図書館に移管され、既に移管済みの本と合わせて四部分類に排架すべく、富永教授や院生と共に作業を続けている。総合科学部旧蔵漢籍も同じく四部分類に排架中で、こちらの担当は図書館職員である。そして、これらを網羅した出版原稿はほぼ整った。多くの方々の御支援によ

ってここまで辿り着いたことを深謝すると共に、引き続き漢籍整理長期研修を礎にして、研鑽を積んでいきたいと思っている。

広島大学をアピールするために明刊本を含む貴重書を紹介したかったのだが、ここで字数が尽きてしまった。またの機会に、執筆したい。

(広島大学大学院文学研究科研究員)

## センター便り

・平成24年度国立大学共同利用・共同研究拠点協議会総会の開催

平成24年度国立大学共同利用・共同研究拠点協議会総会が平成24年12月7日(金)に東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにおいて開催され、本センターも参加した。文部科学省から共同利用・共同研究拠点の中間評価について、ミッションの再定義に関する説明がなされ、様々な意見が交わされた。

東洋学研究情報センター運営委員会委員  
(2012年度)

### 所外委員

大西 克也 大学院人文社会系研究科・文学部教授  
村田雄二郎 大学院総合文化研究科・教養学部教授  
加藤 博 一橋大学大学院経済学研究科特任教授  
小長谷有紀 人間文化研究機構・国立民族学博物館教授  
岩井 茂樹 京都大学人文科学研究所教授  
宮治 昭 龍谷大学文学部教授  
宮嶌 博史 成均館大学校東アジア学術院(韓国ソウル)教授  
柳澤 悠 東京大学名誉教授

### 所内委員

大木 康 教授 東アジア研究部門(第二)  
(兼)センター比較文献資料学  
園田 茂人 教授 新世代アジア研究部門  
(兼)センターアジア社会・情報  
池本 幸生 教授 汎アジア研究部門

### (オブザーバー)

榭屋 友子 教授 西アジア研究部門  
(兼)センター造形資料学  
松田 康博 教授 汎アジア研究部門  
(兼)センターアジア社会・情報  
板倉 聖哲 教授 東アジア研究部門(第二)  
(兼)センター造形資料学  
名和 克郎 准教授 汎アジア研究部門  
(兼)センター比較文献資料学

### センタースタッフ

大木 康(おおき やすし)センター長 センター比較文献資料学分野 中国文学  
園田 茂人(そのだ しげと)副センター長 センターアジア社会・情報分野教授 比較社会学  
榭屋 友子(ますや ともこ)センター造形資料学分野教授 イスラーム美術史  
松田 康博(まつだ やすひろ)センターアジア社会・情報分野教授 アジア政治外交史  
板倉 聖哲(いたくら まさあき)センター造形資料学分野教授 東アジア絵画史  
名和 克郎(なわ かつお)センター比較文献資料学分野准教授 文化人類学



広島大学中央図書館の斯波文庫

### 明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学  
研究情報センター報 第29号

発行日 2013年3月25日  
編集・発行 東京大学東洋文化研究所  
附属東洋学研究情報センター  
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号  
電話 03-5841-5839(直通)  
FAX 03-5841-5898  
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp  
URL http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp

デザイン コスギ・ヤマノ印刷(株)ヒライ